

六月定例能番組

平成三十一年六月二日(日) 午後一時始  
於石川県立能楽堂

加

(能)

天女 福岡 聡子  
ツレ 高野 秀幸  
シテ 木谷 哲也

茂

ワキ 北島 公之

ワキツレ 平木 豊男

ワキツレ 渡貫 多聞

間 清水 宗治

大鼓 田中 一義  
小鼓 住駒 幸英

太鼓 大橋 紀美  
笛 江野 泉

後見 佐野 由於  
佐野 玄宜

地謡 米島 和秋 佐野 弘宜  
水口 純治 高橋 右任  
船本 嘉人 島村 明宏  
長野 裕 松本 博

休憩 二十分

草紙洗

(仕舞)

藪 俊彦

地謡

佐野 弘宜  
佐野 由於  
高橋 憲正  
田屋 邦夫

(狂言)

雷

雷 炭 光太郎 医者 能村 祐丞

地謡 炭 哲男  
荒井 亮吉  
山田 讓二

後見 中尾 史生

(能)

ツレ 藪 克徳  
子方 原 一寿  
シテ 渡邊 茂人

占

大鼓 飯嶋六之佐  
小鼓 住駒 俊介

笛 室石 和夫

歌

後見 島村 明宏  
松田 若子

地謡

浅谷 之信 高橋 憲正  
中村 清 渡邊荀之助  
山崎 健 広島 克栄  
田屋 邦夫 佐野 玄宜

終了 午後四時十五分頃

能加茂(かも)

播州室の明神(わけいかづらのみこと)(別雷命を祀る)に仕える神職(ワキ・ワキツレ)が御一体の都の加茂社へ参詣し、秋近い御手洗川(みでしゐがわ)で水を汲む女たち(前シテ・ツレ)に出会って、川辺に築かれた矢立ての祭壇のいわれを尋ねます。女はその矢が御神体であると述べ、昔この加茂の里に秦(はた)の氏女(うぢめ)という人がいて、川上から流れて来た白羽の矢を夫として子を産み、親子三所が神と齋(い)われた神秘(処女懐胎の縁起)を語ります。女はさらに加茂川の異名を数え、川の名尽くしの謡に興じながら、流れの尽きず濁らない水が神への手向けになるといつて水を汲み、名を問われると「大君を守る尊い神」と答え木綿(ゆうわた)四手(しで)(白い幣)に紛れて隠れます(中入)。衆生の信心に感応あって神々影向(かげむか)の時が至り、まずは天女姿の御祖(みむす)の神(後ツレ)が山川の緑に染まる涼しげな舞を披露し、続いて勇壮な別雷の神(後シテ)があたりを轟(とどろ)かして来現し、雷鳴と稲妻による五穀成就の神威を示して、大空に翔(か)り去ります。

狂言雷(かみなり)

都落ちする數医者(かずいしや)が、初めて武蔵野で診た患者は、何と雷さまでした。気がまくまくするのは中風。これには苦い雷能丹を飲ませて治し、空から落ちて強打した腰骨には針を立てます。押し出しほどに肝(かん)のすわらぬ雷(らい)の、針を恐れ、痛がる様子が見ものです。さて療治して、數医者(かずいしや)は薬代(くすりしろ)を請求し、かなわぬと見るや、病人が薬代(くすりしろ)を払えるよう、五穀(ごこく)を実らす天候管理(てんこうかんり)を頼みます。けがが治れば自信も回復、請け負った雷(らい)は、堂々の昇天(しょうてん)です。

能歌占(うたうら)

加賀の国は白山(しらやま)の麓(ふもと)に住む者(ツレ)が出て、最近評判(おとこみ)の男神子(おとここ)に会って歌占(うたうら)を引かせようと少年(子方)を伴います。男神子(おとここ)(シテ)は伊勢の国は二見の浦の神職(かみ)と名乗り、旅先で頓死(とんじ)して三日後に蘇生(そせい)したものの以来白髪(しらげ)になったと言います。白山の麓(ふもと)の者が歌を書いた短冊(たんさふ)を引くと、父親の病氣は回復するとの判、次に少年が引くと行方知れずの父にすでに会ったと判じます。名乗り合ってみれば男神子(おとここ)は二見の太夫渡会(わたりあひ)の何某(なにがし)、少年はその子の幸菊丸(こうきくまる)でした。長の別れに面忘れの二人を不思議に神が引き合させたのでしょうか。これまで少年の世話をして来たらしい白山の麓(ふもと)の者も奇跡(きせき)に驚き、名残(なごり)を惜しんで地獄(じごく)の曲舞(まがま)(南阿作曲・山本作詞。初め〔百万〕に挿入(さ)されていたのを、世阿弥(せあや)が〔百万〕を改作してこれを削除した後に、元雅(もとみや)が本曲(ほんきょく)に転用)を謡うよう所望(せうぼう)します。地獄廻り(じごくまわり)の体験(たいけん)を曲舞(まがま)に再現(さいげん)した男神子(おとここ)は、神(かみ)がかりから覚めて幸菊丸(こうきくまる)と共に故郷(こきやう)へ帰(か)って行(い)きます。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年七月七日(日)午後一時始

(能)班女 (狂言)重喜 (能)小鍛冶